

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

コレラ流行事情：養生から健康へ

著者	苅谷 春郎
出版者	法政大学スポーツ健康学部
雑誌名	法政大学スポーツ健康学研究
巻	6
ページ	1-8
発行年	2015-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/11202

[原著]

コレラ流行事情 ー養生から健康へー

In Pursuit of the History of the Spread of Cholera

荻谷春郎¹⁾

Haruo Kariya

[要旨]

本研究は、幕末から明治維新にかけて、猛威をふるったコレラ流行に着目し、伝統的な養生思想から近代医科学に依拠する健康思想へと転換した経緯について論じた。

幕末から維新の動乱期に猛威をふるったコレラをいかに封じ込めるのか、時の為政者にとって喫緊の政治課題であった。富国強兵、殖産興業を基軸とする近代国家建設を目指す維新政府は、西欧医学を積極的に導入し、養生思想から健康思想へと転じ、コレラの防疫体制を確立していった。しかしコレラを封じ込める過程で、国家、警察権力の介入を容認する素地がここに生まれ、国家主導による依存型の健康管理が定着し、人々は身体や健康に対する自立性を衰弱させてしまった。

その結果、先進医学を妄信し、己の身体や健康をたわいなく管理されることに馴れすぎてしまっている現状を直視し、今一度、身体や健康を自立的に処理する「養生の思想」について再考すべきではなかろうか。

Key words : cholera, care of health, health

キーワード : コレラ、養生、健康

緒論

コレラは、天然痘、ペストと共に流行のピーク時に大量死をともなったため、人々を震撼させた疫病の代表格といえよう。14世紀ヨーロッパ世界を襲ったペスト（黒死病）による大量死は、近代社会を産み出す陣痛となったといわれる。

しかし、当時ヨーロッパ世界からみて極東の地であった日本列島は、幸いペストによる大量死は免れたが、人々にとってこのペスト禍による恐怖体験の有・無が病に対する心構えに大きな影響を与えたという。

立川は「黒死病一といっても、日本人にはそれほど心理効果はないが、西欧人にとっては今日でも、この一語を超えるほどの恐怖はない。もっともショッキングな効果をもつ忘れがたい歴史的

記憶につながるのである」¹⁾と、つまり、ペスト体験を通じ西欧社会は病に対し攻撃的であり征服すべきものであるとの考えが近代医科学発展の源流となり、幸いにもペスト禍の恐怖体験まぬがれた日本人は、村の辻々に地蔵や道祖神を祀り苛烈な疫病に対し“なだめ”“すかし”“しずめ”ひたすら神仏に祈りを捧げ疫病禍をやり過ごす守りの姿勢へとつながったといわれる。

だが、ペスト禍をまぬがれた日本人も、江戸時代後期になると欧米列強による開港、開国要求がくりかえされ、海外からの人と物の交流が盛んになるにつれ、鎖国下の日本においてもコレラ侵襲の脅威に曝されることになった。

流行当初、大量死をまねく得体の知れぬ疫病の猛威に、流言飛語、異国人迫害等を伴って幕末動

1) 法政大学スポーツ健康学部

乱期の庶民の心を激しく揺さぶった。

人々の暮らしぶりが大きく変貌した幕末から維新の動乱期に猛威をふるったコレラ流行は、幕府の権威を失墜させる遠因となると共に、近代国家建設と富国強兵を急ぐ明治政府にとって喉にささる棘のごとく作用した。

このコレラ体験を通じ、貝原益軒に代表される「よく身を保つべし」といった従来の養生思想では、もはやコレラ禍に対処できないことを知ることになる。

旧来の「養生観」に変わる新たな衛生思想の導入が喫緊の課題となり、西欧型医学の導入が急がれ、そこで江戸時代には殆ど目にする事のなかった「健康」の二文字が「養生」にとって替わる用語として注目されるようになった。

明治政府は欧米列強にならって徴兵制度を導入したものの、一般庶民から募った若者の体力と健康状態の脆弱さに驚愕し、明治政府の首脳陣は強い兵士の養成こそ近代国家建設の基本であり、「国益に直結する健康観」の発想に至った。そこで欧米流健康法を紹介する啓蒙書の刊行が激増し、健康の二文字が頻繁に用いられるようになり、養生思想は駆逐され、瞬く間に欧米型健康思想へ転換していった。

本論文では、コレラ流行が契機となり「養生」の二文字が消滅し「健康」の二文字に取って替わっていく過程を概観し、「個人のための健康」から「お国のため健康」へと変貌する様子を記していきたい。

第一章・コレラの病態と社会現象

まずもって、コレラの知見と現状について概観しておこう。

コレラ菌は、「ビブリオ科 (*Vibrionaceae*) ビブリオ *Vibrio* 属に分類され、主に海水や淡水に生息し、増殖のために食塩（塩化ナトリウム :NaCl）を必要とする菌が多い。一中略—コレラ毒素を産生する 01 菌・0139 菌によって発症し、毒素は腸管上皮細胞に作用して腸粘膜の水透過性を変化させ、大量の水分と電解質を腸管外へ排出させる。それが激しい下痢となり、失われる水分は、とき

に一日 10L 以上にもおよぶ。そのため、患者は著しい脱水症状、電解質異常、循環障害を起こす。潜伏期は 1～3 日で、一般に激しい下痢と嘔吐を主症状として発症する—中略—現在、世界では毎年十万人を超えるコレラ患者が報告され、実際にはそれをはるかに上回る患者が発生していると推定される」²⁾

とあり、エルトール型菌は 1960 年から断続的に流行を繰り返し、現在第 7 次に至る世界的流行が発生している。

日本におけるコレラ流行のはじまりは、富士川によれば「虎列刺病の初めて我が邦に入りしは、文政五年（1822）にして、西国に起り、中国より浪華に進み、京師にも波及したり。その症暴劇にして、医俗共に未だ會て見ざるところの一病なりしが故に」³⁾ と、この文政年間とは江戸時代中期にあたり、徳川幕府は島原の乱を制圧した後、キリスト教と百姓一揆が結びつくのを恐れ海外の渡航や交流、貿易を禁じる鎖国政策を段階的に進め 1639 年（寛永 16）に完成、国内重視の政策へと移行し、表面的には 180 年近く続く「泰平の世」を謳歌することになる。

だが世界は、18 世紀後半イギリスに始まる産業革命によって、単なる大航海時代の冒険を終焉させると同時に、欧米列強各国は競って資源と市場を求めて軍艦を編成し国力を誇示しながら、植民地獲得に狂奔する時代を迎えていた。

18 世紀末頃から日本各地に外国船が来航しはじめ、やがてロシア船が蝦夷の地や根室に再三現れては通商を要求、さらにはイギリス船が常陸、琉球、浦賀等に出現し、その対応に追われた幕府は「異国船打ち払い令」を打ち出し、鎖国政策を続行する強い意思を列強各国に示したが、外圧の潮流を変える事は出来なかった。

列強各国の波状的な開国要求に幕府は、ついに 1842 年（天保 13）外圧に屈する形で打ち払い令を緩和する処置を取らざるを得ない事態となり、幕府の制度疲労と統治能力の低下が顕著となり、幕末動乱の時代を迎えることになった。

こういった時代背景の中で、1822 年（文政 5）

初発のコレラが西国から中国を経て対馬に達し、疫病の脅威にさらされることになった。

先述したが、武士階級を行政官とする幕藩支配体制は、江戸初、中期には表面的には機能していたものの、19世紀の産業革命の影響が極東最果ての地・日本列島にも及ぶにつれ、制度疲労で硬直化した幕藩体制にはもはや、鎖国政策を継続、維持していく力を持ち合わせてはいなかった。

その間隙について来襲したコレラは、未だかつて見たこともない劇症型を呈し「見急」「横病」「鉄砲」「三日コロリ」等と呼ばれ、その伝播力は強く激しく成す術もなく、医俗共に恐怖し「奇態の病流行して人死して夥敷、其病症といえるは、初発微しく頭痛して忽ち腹痛、大下痢を發し、寒熱往来、止むことなく、何となく気分悪く、飲食進まず、忽ちにして目を見つめ、^{ちくじゃく}搐搦して四肢厥冷に至るや否や、即刻死す」³⁾と記す。

それから36年後の1858年（安政5）、第三次の世界的大流行による余波が日本列島に達し、3年間にわたり惨劇を繰り返したが、当時「米国との修好条約調印と開港」「大老・井伊直弼による安政の大獄」等、幕末騒乱期にあたり世情は騒然、重ねてコレラ流行の直撃は人口の密集地である百万都市・江戸市中は騒然となった。

梅毒流行には呑気に対応していた江戸庶民も、コレラの激甚性に加え致死率の高さによる大量死に直面し「即時に病みて即時に終れりと」となす術もなく恐怖心は頂点に達した。

コレラの大量死に埋葬処理が追いつかず「安政箇勞痢流行記概略」⁴⁾によれば「病倍々盛んにして、死したるもの大きは一町に百余人、少きは五六十人、葬礼に棺大路に^{うちつぎ}陸続て、昼夜を^{すて}棄ず、絶える間なく、御府内数万の寺院は、何所も門前に市をなし、焼場の棺所せまきまで積ならべて、山をなせり」と、やがて火葬に間に合わず江戸各処の焼き場には、大八車で棺桶や酒樽に詰められた遺骸が幾重にも積み上げられ、日々数百人以上の遺骸を焼き残すといった惨状を呈し、茶毘に付されない屍体は腐敗し、市中に臭気が立ち込めるに至って、寺社奉行は、所定の焼き場以外でも土葬によ

る仮埋葬の触書きや、さらには品川沖に屍を流す水葬の奨励など、迅速な死体処理によってコレラ蔓延を抑止する法令を発し、コレラの猛威に対応した。

何時の時代も、劇症型疫病によるパンデミックな状況下では上下貴賤、老若男女を問わず神仏への病氣平癒祈願や土着医療等に走り、ただひたすらコレラの猛威をなだめ、鎮め、祀りあげて、災禍をやり過ごすしか術はなかった。

当時のざれ歌に、諦め、自嘲、不安等庶民の切実な心象が読み取れるので、記してみよう。

『^{末代} ^{断語} 掃寄草紙』⁴⁾

一時期りであっけない

白無垢損料安くない

八つ手を吊るさぬ家はない

和尚も納所も寝る間がない

医者のかけつけ間に合わない

戒名つける文字がない

葬い昼夜とざれがない

亡者を葬る地所がない

焼き場の付き込みらちあかない

米の相場はさがらない

もとより、幕末騒乱期に正確な死者数を示す統計的な数値は存在しない。

コレラに関する類書から推察すると、「諸宗寺院死人書上写」³⁾では、安政5年7月から9月に江戸中の諸寺院が扱った死亡者数は二十六万八千五十八人と記し、「男女死出廻路帳」¹⁾の資料では、諸寺院が扱った死者数は二十三万八千八百三十二人、千住をはじめ八か所の焼き場が扱った死者数は十四万三百七人、回向院が扱った人別なき者の数は不明と記している。

いずれにしても騒乱、激動の幕藩体制末期にあって正確な統計数値は求めようもないが、コレラに罹患した人々は二～三日で死に至り、焼き場に運ばれ積み上げられた亡骸は火葬の順番を待ち、棺桶からは腐臭立ち込めた。一日に二～三百人の死者、百万都市から数十万単位の間人が忽然と消えていく様に接し、ペスト体験のない江戸庶民は意

気消沈、混乱の極致に達した。

一方、鎖国下にあって繰り返し開国を要求し、加えてコレラを持ち込んできた毛唐人に怒りの矛先が向かい、外国人排斥を主張する攘夷運動に拍車がかかったとも言われる。

勝海舟の回想記に「この地の民、^{かでんりゅうげん}訛伝流言して、英人の毒を流せるなりと」⁴⁾とあり、異国人が井戸に毒物を投入しコレラ禍が発生したと焚き付けた。この地とは、勝海舟が長崎伝習所で目撃したコレラ禍であり、異国人排斥の思想と相まって、毒物散布という流言飛語を記した貴重な記録である。

いつの世も、戦乱、天災、疫病蔓延等社会不安が増幅する時代にあつては、言われなき流言が飛び交う、無知なる人々は誤った情報に錯乱し、時に暴徒化し一層社会不安を煽りたてるのは、歴史の法則ともいえよう。

中世ヨーロッパのペストの災禍は、毒物散布者としてユダヤ人を大量虐殺し血祭り上げ、さらに1832年（天保3）のコレラ大流行の際、ロシア、フランスにおいて民衆が暴徒化し医師が迫害を受けたが、日本においても1877年（明治10）には千葉でコレラ患者を救おうとした医師が「肝とり」の流言に惑わされた狂信的村民に惨殺されるなど、何時の時代においても、根拠なき流言飛語は疫病の恐怖を助長する役割を担ったのである。

第二章 幕末コレラ騒動の実態

コレラが激甚さを増すなか、「奇病妖怪の仕業」「生魚による食中毒」「水毒」「異国人の毒薬散布」等々、突然降ってわいてきたような奇病に対し、流言飛語が飛び交う中、幕府の強圧かつ無防備な対策に不信感がつのっていった。

コレラの第一波は、鎖国中の対馬や下関を襲い初のコレラ患者が確認され（1822年・文政5）、その後、萩、広島、岡山の山陽一帯で猛威を振り、ついで兵庫から水の都・大坂で猖獗を極め、ようやく秋から冬に向かって終息の兆しをみせた。水の都・大坂は、四方八方に水路が張り巡らされ、物流活発な商業都市として発展してきたが、この

都市構造が災いし、コレラはこの水路を伝って人々を襲い、日に二～三百人という未曾有の死者を茶毘に付す被害をもたらした。

コレラ流行の初期から、コレラと水と水路に何等かの因果があるとの疑念をいだく医学者、蘭学者もいたが、コレラを封じ込める力とは成りえなかった。

この頃、英国の医師がロンドンのスラム街の共同井戸を調査し、これら井戸を中心にコレラが発生していることを突き止め、コレラの汚染源が共同で使用する井戸であると特定した。当時、上下水道の普及は不十分であったが、これ以降社会資本を重点的に投入し急速に上下水道が網の目の様に普及し、井戸水の使用を禁じる規制を徹底し、これらの施策により英国ではコレラ侵襲を抑え込むことに成功したが、未だ日本ではコレラと水との関係を知る由もなく、防疫対策として生かされることはなかった。

第一波のコレラは商業都市・大坂で終息したが、33年後の安政五年（1858）長崎に上陸したコレラは、日本列島を北上し続け、ついに百万都市・江戸に達し、徳川幕府の中枢を揺さぶる被害をもたらすことになる。

幕府は、海軍伝習所を窓口、欧米の科学的知見を積極的に導入する策に転じ、来日したオランダの海軍医・ボンペイを介してオランダ医学を学ぶことになった。

ボンペイは、清国で流行しているコレラが間もなく日本にもやってくると予言し、治療法としては「^{リュウサンキニーネ}硫酸規尼涅、^{アヘンチンキ}阿片丁幾の合剤を第一期に与えることを唱道せるに始まり、その処方

は広く医家の間に行われ、これがために薬舗に^{ひき}鬻ぐところの硫酸規尼涅は殆ど尽きて、その価極めて貴きを至せりと云う」³⁾とキニーネとチンキを処方し、薬舗では高値で取引された。一方「生鮮食品の管理」「禁止食品」「生活習慣の修正」等、防疫対策を研修生に施したとあり、オランダ医学を通じて、かすかにではあるがコレラの治療・予防対策への道はひらけつつあった。

イタリア人医師・フィリップポー・パッチーニ

(Filippo Pacin / 1812 - 1883) は、「1854 年に患者の糞便から大量の細菌が存在する」⁶⁾ 事を見出し、これがコレラ菌の病原体だと考え、イタリアの学術誌に発表した。しかし、当時はまだ細菌が病原体であるという考えが証明されていなかったこともあり、ヨーロッパの学者達の目に止まることもなく、この発表は以後 30 年にわたって日の目をみることはなかった。

その後、1884 年にロベルト・コッホ (Robert Koch 1843 - 1910) がこれとは独立したコレラの病原菌を発見した。つまり、欧米の医学界では 1854 年(安政 1)にはコレラ菌は特定されていたが、明らかに細菌＝病原体との認識は乏しかったこともあり、1857 年(安政 4)に来日した 28 歳の若きオランダ海軍医官・ポンペイ (J. J. L. C. Pompe van Meerdervoort 1828 - 1908) の知識と経験では、コレラを水際で防御することは出来なかったといえよう。

19 世紀後半の細菌学黄金期の中心的存在であり「細菌学の開祖」と称されたロベルト・コッホは、1883 年(明治 16)にコレラが猛威をふるうエジプトに派遣され、患者の腸管で増殖している菌を観察、コレラ菌が患者の糞便に存在することを確認、翌 84 年ドイツ政府に報告したことによって、コレラ菌＝病原体であることが証明された。第一発見者であるイタリア人医師・F パッチーニの偉業から 30 年後のことであった。

顕微鏡の発明によるコレラ菌＝病原体の証明は、コレラの治療法、防疫体制に一筋の光明を見出し、医学的治療体制ならびに国家的防疫体制の確立へと向かっていった。

第三章 養生から国益優先の健康観へ

徳川は「明治という時代は、徳川時代の全否定から始まった」⁷⁾ と指摘する。

明治政府は、180 余年続いた幕藩体制を徹底して破壊すると同時に、富国強兵、殖産興業による近代国家建設を目指し、欧米列強に追いつき追い越せのスローガンのもと新たな制度設計に邁進していった。明治政府による制度変更は医学界にも

及び、従来の漢方医学廃絶の道を選択し、1895 年国会第八議会において「漢医継続願」が否決され、その結果漢方医学は極端に衰退していった。

大塚によれば「軍隊や学校、集団生活、工場にはそれに相応する軍陣医学、集団予防医学や集団治療医学、防疫医学などをもっている近代医学が必要であった。封建時代における軍陣医学はきわめて幼稚なもので、産業は零細な家庭手工業であったから、集団的予防治療医学などは発達する必要はなかったのである」⁸⁾ と指摘する。

1875 年(明治 8)には「西洋七科」の制を定め、西洋医学七科の試験に合格した者以外は医師として認定されず、漢方医学存続の道は断たれた。

時代は、幕藩体制を破壊し、近代国家建設を急いでいる最中であって、コレラを水際で撃退することは明治政府にとって重要課題でもあった。

富国強兵を旗印に近代国家建設を提唱した山県有朋、大村益次郎等は近世的な個人の武技に依拠する戦法では、欧米列強の軍事力に対抗しえないとし、近代的な軍組織の構築と国民皆兵の必要性を強く主張した。

伝統的な「兵農分離」を廃し「四民平等」の軍隊編成を提唱し、全ての国民に兵役義務を課し發布した。

「徴兵告諭」の一節に「人たるもの固より心力を尽くし国に報ぜざるべからず。西人はこれを称して血税と云う。その生血を以て国に報ずる謂(いわれ)なり」⁹⁾ と、欧米列強の徴兵制度を例にとり、国家による徴兵を正当化した。

しかし、庶民は「血税」「生血」によって旗や帽子を赤色に染めるための徴兵だと誤解し、各地で反対運動が起こった。が、政府は徴兵制を実施しなければ独立国家の建設は出来ないと強く主張し、国民皆兵に踏み切ることになった。

同時に、小学校を義務教育化する「学生發布」を発令し、国民の不満を和らげるために軍人勅諭や教育勅語による国防思想の啓蒙、普及に腐心した。

徴兵制度の発令は、国家が管理する軍隊への道を切り拓いたが、一方明治政府への庶民の不平不

満は膨張し、その緩和政策として国内から国外へと目をむけさせる必要性に迫られた。

そこで、外交面で明治新政府を無視し非礼を繰り返しているとする朝鮮国に対し「征韓論」が起こり、朝鮮へ出兵すべしとの声が権力中枢の一部から上がった。だが、破綻寸前の新政府の財力を憂慮し、反対意見が多数を占め朝鮮出兵を断念することになった。

それに替わる派兵を考えた新政府は、1871年（明治4）台湾に漂着した54人の琉球人を台湾人が殺害、略奪したとの理由により、1874年（明治7）台湾に出兵した。日本軍はいとも簡単に上陸、勝利したものの、しかし、衛生面での準備を怠った無謀な海外派兵は大きな付けを払わされることになった。

戦闘による戦死者10人に対し、コレラ、マラリヤ、破傷風、その他の伝染病で戦病死する兵士が500人超、戦いに勝利はしたものの戦病死者多数という、惨憺たる結果を残し帰還した。

さらに日清・日露戦争においても戦死者に匹敵する伝染病死者を出すに至り、近代衛生行政の確立が急がれた。

国民皆兵、海外出兵、多数の戦病死兵を無残な結果を突き付けられた明治政府は、国民の身体や健康に強く関心を持つに至り、軍隊や学校等の集団的組織に対し、国家主導による様々な健康法が提唱され、実践、奨励されるようになった。

さらに、台湾出兵、日清、日露戦争での苦い体験を期に、軍隊の過酷な集団生活に耐えうる若者を徴兵検査により選別し、欧米列強の兵士に対抗しうる屈強な徴兵軍人の育成を目指した。

これを機に、国民の健康を集権的に管理する衛生行政の手法が定着し、「個人や家のための養生」から、「集団や国益に直結する健康」の強化が提唱されるようになった。

以後、西洋流の啓蒙書や衛生書の中で盛んに「健康」の二文字が使用され、やがて「養生」の二文字は姿を消していくことになった。

健康問題を国家が管理し、警察権力が介入する構図が確立したのは、コレラの防疫対策からである。

「コレラは治療よりも隔離と消毒」とする考えにより、警察権力は圧倒的強制力をもって患者宅に踏み込み、徹底した消毒と焼却、さらにはコレラ患者の避病院への拉致と隔離が強行された。

コレラが発生すると、その区画一帯の交通を遮断し、患者の家には標識が立てられ、消毒のため石炭酸が大量に撒かれると同時に魚介類の売買等も禁じられた。患者は、臨時に開設された「避病院」へと強制的に送られ隔離されたが、十分な医療設備もないバラック建ての粗末な施設に「避病院に送られた最後」と庶民にとって恐怖の対象の一つであった。

消毒や隔離収容はなどの防疫作業は内務省の管轄下にあった警察権力が全面に出てきたため、庶民はコレラそのものの恐怖よりも、むしろコレラを契機に庶民の暮らしの奥深くまで踏み込んできた警察権力への不満や反感はつのるばかりであった。

内田百閒は「百鬼園随筆」で、海水浴に出かけ旅館に宿泊中、警察官による強圧的な立ち入り検査の体験を記している。『一寸あの音を聞きなさい、そら巡査が来ましたぜ』私供は、足音をぬすんで、真っ暗な外に逃げ出した。（中略）虎列刺と云う恐ろしいものが、わざと姿を消して、私共を追っかけている様に思われた。（中略）汽車に乗って、郷里の町に帰ってから二三日すると、私共の町内にも虎列刺が出来た。こわごととその家の前を通って見たら、だれもない店の入り口に、縄を一本引っ張って、巡査が外に起っていた。縄が新しいため、変に綺麗な黄色をしていた。家の人は、もうみんな、連れて行かれたに違いない。辺りに烈しい薬の臭いが散らかっている。それが、何だか巡査が臭っている様に思われた。（中略）白い洋服を着た人が大勢、つかつかと家の中にはいつて来た。海水浴から逃げて来たのはだれだれだと調べられた。私は裏の座敷でつかまって、裸にされた¹¹⁾ 白い防疫服にみを包んだ警察官や役人がまるで犯罪者を捜すがごとく、家の中に踏み込んでくる横暴な警察権力の様子を冷静な筆致で描いている。

関野は「明治政府が打ち出した徴兵制度や地租改正などの新政策は、富国強兵に必要なものだっ

たが、それまで放置されてきた民衆を国家という枠の中にはめ込もうとしたため、あちこちで摩擦が起きた。それが病気とのかかわりという形で爆発したのが、コレラ騒動だと思う¹²⁾と指摘する。

新政府の「公益の為の健康」はやがて庶民のレベルにまで浸透し「不健康＝悪」へと飛躍し、全ての若者は徴兵検査に合格し、お国のために役立つ健康、壮健、強健な若者でなければならぬとし、彼らを生み育て国家に捧げ育成することが肝要との思想が、家庭や職場や学校等社会全般の常識へと変容していった。

文字通り壮健な身体を血税として国に捧げる思想が強要され、やむをえず養生から健康への思想を民衆は受け入れていった。

明治政府による国家主導の衛生・健康管理は、オーストリアの「衛生警察」の考えを踏襲したものとされるが、コレラ克服のためには人権無視も止むなしとの思想が根底に流れ、その後も、官主導の衛生行政、医療行政等々は脈々と引き継がれ今日に至っている。

結論

江戸幕末期から明治維新政府へと権力中枢の移行は、「徳川の時代の全否定から始まる」とされるが、欧米列強に範をとり、立憲政治の確立、富国強兵、殖産興業、地租改正等々を推進し、新しい国づくりに突き進んでいった。また鎖国政策の終焉は、開港とともに市場の開放を意味し、生活と消費の革命が急激に進むことになる。海外から多数の人々を呼び込む、と同時に海外へと雄飛し欧米各地へと散っていった人々も激増し、人的交流が加速した。

幕末から維新にかけての急激な変容は、同時に日本列島全域わたって感染症の脅威に曝されることになり、ペストの災厄から逃れた日本人も、コレラの災厄から逃れることは出来なかった。

コレラ流行の脅威によって、慣れ親しんだ養生思想を放棄し、新たな公衆衛生を基盤とする防疫体制により、かろうじてコレラの猛威を水際で食い止めることができたことにより、「養生」から「健

康」へと新たな時代が始まった。

そもそも健康の二文字は、中国の古典「易経」にある「健体康心」を短縮した言葉とされ、「健康」の単語は幕末までは医学の専門書の一部で使用されてはいたが、維新前後の庶民にとって馴染みの用語ではなかった。

幕末期の万延元年、咸臨丸で渡米した福澤諭吉は、帰国後「増訂華英通語」なる英語の辞書を出版、そこで「health」を「精神」と訳したが、その後「西洋事情初編」で「health」を「健康」に訳し替えし、「西洋事情外編」「学問の薦め」等の啓蒙書で「健康」の二文字を多用したことから、庶民に浸透する契機となった。

西洋の事情を紹介する啓蒙家としての福澤諭吉は「健康」の二文字を多用することによって、庶民に浸透することを期待していた。しかし、肉体や精神を自発的に鍛錬し健康にさせる難しさを感じるようになり「時事小言」で「もはや国民の自発性に期待せず、中央集権によって国民の弱さを補って、国の独立や対外的威信を築こう」¹⁴⁾とし、国家の権力を背景に、殖産、富国強兵のためには強靱な体格、体力を有する健康体の獲得が重要と提言することになる。

福澤等の提言は、公衆衛生上の諸課題を解決する上で国家、警察権力の介入の素地が培養され、日本における健康観や防疫体制に多大な影響を与えることになったが、その端緒となったのが幕末から維新社会の庶民生活を震撼させたコレラの感染爆発であったといえよう。

引用文献一覧

書名 著者 発行所 発行年月

- 1)「病いと人間の文化史」 立川昭二 新潮選書
2014年04月
- 2)「わかる！身につく！病原体・感染・免疫」
藤本秀士編著 南山堂 2008年03月
- 3)「日本疾病史」 富士川 游著 東洋文庫133
平凡社 1969年02月
- 4)「日本人の病歴」 立川昭二著 中公新書
1976年11月

- 5) 「病が語る日本史」 酒井シヅ 講談社 慶応義塾 1958 年 11 月 (順不同)
2002 年 05 月
- 6) ja.wikipedia.org / wiki / コレラ菌 (本稿は、平成 26 年度法政大学国内研究員制度の
7) 「江戸は世界最高の知的社会」 徳川宗英著 助成金による研究を一部含むものである)
講談社+α新書 2013 年 12 月
- 8) 「東洋医学をさぐる」 大塚恭男編
日本評論社 1973 年 12 月
- 9) 「病と健康のあいだ」 立川昭二著 新潮選書
1991 年 05 月
- 10) 「幕末史」 半藤一利 新潮文庫
2008 年 11 月
- 11) 「百鬼園随筆」 内田百閒 新潮文庫
2002 年 05 月
- 12) 「病気で読む・維新前後の日本」 関野政直
朝日新聞 (夕) 1996 年 04 月
- 13) 「徴兵制」 大江志乃夫 岩波新書 1981 年
- 14) 『健康』の日本史 北澤利一 平凡社新書 068
2000 年 10 月

主要参考文献一覧

- I) 日本コレラ史 山本俊一 東京大学出版会
1982 年 7 月
- II) 維新前夜の江戸庶民 南 和男 教育社
1980 年 8 月
- III) 益軒十訓 上・下 貝原益軒 有朋堂書店
1913 年 5 月
- IV) 養生訓 貝原益軒・著 / 杉靖三郎・編
徳間書店 1968 年 7 月
- V) 貝原益軒処世訓 久須本文雄 講談社
1989 年 9 月
- VI) 養生訓に学ぶ 立川昭二 PHP 新書
2001 年 1 月
- VII) 感染症と文明 山本太郎 岩波新書
2011 年 6 月
- VIII) 疫病と世界史 W.H. マクニール 新潮社
1985 年 5 月
- IX) 伝染病研究所・近代医学開拓の道のり
小高 健 学会出版センター
1992 年 11 月
- X) 福翁自伝・慶応義塾創立百年記念 福澤諭吉